

《資 料》

第二部夜間課程の授業と成果

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 第二部の授業の担当
- 3 第二部における授業の特徴と方法
 - (1) 授業の特徴
 - (2) 授業における附属図書館の活用
- 4 日本経済史の講義
 - (1) 講義の概要
 - (2) 履修者と成績
 - (3) 改編後の日本経済史・日本経済社会史論
- 5 教職科目の経済地理学の講義
 - (1) 1992年度の講義
 - (2) 1996年度の講義
- 6 演習とその成果
 - (1) 演習担当の経緯
 - (2) 1994年度の演習の成果
- 7 第二部教育の充実に向けて

1 はじめに

岡山大学経済学部には経済学科とともに夜間課程の第二部経済学科がある。1949（昭和24）年に法文学部などの5学部をもって設置された岡山大学には、法経短期大学部が併設されたが、それは1965（昭和40）年に法文学部第二部法学科、第二部経済学科となった。1980（昭和55）年4月、法文学部の改組により、文学部、法学部、経済学部が設置された際に、法文学部第二部経済学科は、経済学部第二部経済学科となった。

法文学部第二部は法文学部に内包されながら、独自の教官組織、事務組織を有していた。第二部経済学科は5講座で、教官定員は8、学生数は50であった。当初は講義は第一部教員が第二部の講義を、第二部教員が第一部の講義を非常勤講師として担当したが、演習はそれぞれの専任の教員のみで担当した。1978（昭和53）年4月に第一部と第二部の教官組織は合体した。それ以降は全教員が第二部の授業を担当するようになったが、このことは1980年の経済学部設置後も同様である。

1980年に経済学部が設置された際に、第二部経済学科の学生定員は60となり、また第三年次社会人編入制度を導入して第三年次学生定員10がついた。現在はこのような学生を対象して教育を行なっている。

2 第二部の授業の担当

私の第二部における授業担当は以下のとおりである。

日本経済史（通年4単位）〔1994年度をもって廃止〕

1970（昭和45）年～1983（昭和58）年の毎年度、1985（昭和60）年～1991（平成3）年の毎年度、1993（平成5）年度

日本経済史（半期2単位）〔1995年度開設〕

1995（平成7）年度、1996（平成8）年度

日本経済社会史論（半期2単位）〔1995年度開設〕

1995（平成7）年度、1997年度

経済学演習・演習（通年4単位）

1977（昭和52）年度、1978（昭和53）年度、1981（昭和56）年度、1990（平成2）年度

特別演習（経済史）（通年4単位）

1983（昭和58）年度、1988（昭和63）年度、1994（平成6）年度

外国書講読（通年 4 単位）

1979（昭和54）年度，1984（昭和59）年度

経済地理学（半期 2 単位）

1992（平成 4）年度，1996（平成 8）年度

第一部の教員として着任したため，当初は日本経済史の講義だけであった。着任の1970年度から1976年度までは毎年度この日本経済史の講義を担当した。1977年度に第二部に配置替えとなり，第二部の専任として日本経済史の講義とともに演習も担当するようになった。しかし翌年の1978年度に第一部，第二部に分れていた教官組織は合体した。第二部主事を除き全教員が第一部所属となり，全教員が第二部の授業，すなわち，講義，演習，外国書講読，特別演習を担当することとなった。演習・特別演習，外国書講読は適宜交替での担当である。この1978年度から日本経済史の講義のほかに，年度により演習，特別演習，外国書講読を開講することとなり，1978年度は演習，1979年度は外国書講読，1981年度は演習，1983年度は特別演習を担当した。

その頃は，講義を全教員が毎年度開講していたが，1日二コマという限られた時間帯に毎年すべての講義を開講することの可否が問題となった。履修生の数と教員の負担の問題である。例えば日本経済史の場合，1970年度から1983年度の14年間，各年の期末試験を受けた者の数は，10人台 2 回，20人台 8 回，30人台 2 回，40人台 2 回で，この間の合計人数は387人で，1年平均27.6人であった。これが履修登録者のすべてではないが，平均30人未満という小人数であった。それでも程々の人数で，もっと少ない人数の授業が少なくなかった。小人数の適否に加えて，1987年4月の大学院経済学研究科（修士課程）の発足によって教員の負担増加の問題もあった。検討の結果，全教員が毎年度1コマの授業を担当する，講義は必ずしも毎年度ということではない，ということになった。このような改訂の後，1990（平成2）年度は演習のみ，1994（平成6）年度は特別演習のみであった。なお，1992（平成

4) 年度は経済地理学を担当した。これらの年度には日本経済史は開講しなかった。

この経済地理学であるが、これは社会科教員免許状の関係から経済地理学の経済学部専任教員による開設が必須となったものである。4年に1度開講するが、それを担当することとなった。

大学設置基準の大幅の改正にともない、岡山大学においてもカリキュラムが大きく改訂され、セメスター制を導入した。経済学部においては、1995年度から従来の通年の講義科目は2分割し、半期のもの2科目とした。それにもとづき日本経済史は日本経済史と日本経済社会史論とになり、1995年度からはこれらの講義科目を開講した。1996年度は経済地理学を開講したので、日本経済史のみで、日本経済社会史論は開講しなかった。また、引きつづく授業改革のなかで、第1年次学生に基礎演習を開設することとなり、1997(平成9)年度に私もそれを担当している。この1997年度は日本経済史は開講せず、前年度に開講しなかった日本経済社会史論のみの開講である。また、一般科目の充実の一環として総合科目「史料でみる近代日本と地域 A」「史料でみる近代日本と地域 B」の担当代表者としてその一旦を担うこととなった。

これからの期間は、1998年度は前期日本経済史、後期日本経済社会史論、1999年度は演習を担当し、総合科目のまとめ役を続けることとなると思われる。

3 第二部における授業の特徴と方法

(1) 授業の特徴

第二部は本来は勤労学生教育機関としての夜間課程であるが、現実には必ずしもそうではない。入学者選抜方式も多様で、一般入学試験のほかに、推薦入学試験、第3年次社会人編入試験などである。経歴を異にし、年齢的

にも幅がある。このように多様の学生が学んでいることが大きな特徴である。

入学定員が小さいので、大方は昼間部よりも小人数の授業となっている。相対的に小人数ということは教育上では大きな利点となる。

授業は、授業時間は当初は17時30分からの90分授業、後には19時40分からの90分授業の1日2コマである。週10コマからの履修であり、授業の選択の余地は大きくない。学生たちは1日のうちのこの2コマの時間帯に勉学を凝縮し、密度の高い時間帯としている。

このような特徴を有する第二部の授業であるが、授業を行なうにあたって、授業に出席するようにすることに心がけてきた。アルバイトを含めて就労している者が多くて勉学時間のとれない第二部学生にとっては授業が最も大切な勉強時間であると考えて、出席することを求め、最初から出欠をとっている。

つぎに、学生たちを能動的にすることである。そのためにとり入れたのが授業における附属図書館の活用である。

(2) 授業における附属図書館の活用

第二部は学生数が少ないということから、授業中に学生を図書館に連れていき、その備え付けの図書資料によって実習の授業をすることができた。この図書館利用による授業についてすでに記したことがあるが、⁽¹⁾ここで改めて記そう。

1983年度についてみよう。この年度の6月21日に、「大学附属図書館の利用について」というアンケート用紙を配布して回答して貰った。

大学附属図書館の利用について

- I 附属図書館入館の有無 1 有 2 無
- II Iで有 という人に

- (1) 図書館利用頻度 週に 回, 月に 回, 年に 回, 入学以来 回 (いずれかに記入)
- (2) 図書館利用形態 入ってみるだけ ロビーで雑談 グループ室を利用 新聞雑誌を読む 持ち込んだ書物を読む 備え付けの書物を読む 試験準備レポート作成・ノート整理に利用する 図書を借り出す コピーをする その他
- (3) 図書をさがした人に
 - ① 書庫に入ったことの有無 有 無, ② 目録カードを引いたことの有無 有 無 ③ 参考調査係等で聞いたことの有無 有 無
- (4) 図書の貸し出カードの有無 有無
- (5) 学生希望図書申込制度について
 - ① この制度 知っていた 知らなかった, ② 希望を出したことの有無 有 無 ③ この制度を活用したいと思うか
- (6) 日曜日開館について
 - ① 日曜日開館 知っていた 知らなかった, ② 日曜日利用 有 無
- (7) 夜間開館について
 - ① 夜間開館 知っていた 知らなかった, ② 夜間の利用 有 無

Ⅲ Iで無という人に

- (1) 入館しない理由
- (2) 日曜開館を知っていたか
- (3) 夜間開館を知っていたか
- (4) 入館したいと思うか
- (5) どのようなであれば入館(利用)しますか

Ⅳ 図書館について大学に希望したいことはありますか。あれば記してください。

Ⅴ 大学入学以来, 大学附属図書館以外の図書館を利用したことがありますか。ある人は県内・県外を問わずその図書館名を記入してください。そのうち大学附属図書館の紹介によるものにはその旨記してください。

Ⅵ あなたにとって大学図書館とは何(どのようなところ)ですか

このようなアンケートの後の7月5日に図書館に連れていった。

そして、小ペーパーに記入して貰った。それは、(1) 入館時刻 (2) 退館時刻 (3) 何をしたか (4) 図書館に入っの感想、である。

ある学生、編59-891 WATANABE. H の軌跡を記す。

W.Hは、6月21日のアンケートにおいて、Ⅰに対しては→無、Ⅲに対しては、(1)→二部学生なので時間的に無理と観念している、(2)→知らない、(3)→知らない、(4)→いまのところはっきりしない、(5)→(3)の質問により夜間も開館と知った。少し落ちついて内容を握みたい。Ⅳ→[記入なし]、→倉敷市立児島図書館、そしてⅥのあなたにとって大学図書館とは何(どのようなところ)ですか、に対しては「記念写真の背景とタクシーなど他人に経済学部などの位置を説明するためのポイント。時計で時刻を見る」と回答していた。

7月5日には図書館入館後の感想文をこのW.Hはつぎのように記している。

- ① 入館時間 午後6時6分位 ② 退館時間 午後7時8分
③ 何をしたか

索引カードの方式を確かめる。・約10分位、一階を歩いてみる。雑誌コーナ、コピーコーナーを知る。・受付係と話す。カバンはロッカーに預ける(盗難防止)。学生証を提示する。他の大学生などは紹介状が必要。借出しには、手続をを済ませて貸出カードを作って貰う。貸返はコンピューターが管理。・約10分二階をうろつく。左手の目録カードの部屋から始めることを知る。「目録カードの引き方」の掲示を読み始める。日本十進法分類で、主綱表200歴史の日本210を知る。カードの箱を探す。日本史 中国地方217を引き出す。うち「岡山」を繰る。約10厘位の厚さ。一枚一枚を当る。角田直一、卯三郎(永山)の名にぶつかる。郷土史が主で、これから当る法もあるが、いきなり「岡山の風俗史」と言ったものに出会いたかったが。6時50分と時計の針が速い、あわててしまう。カードを読むだけで終わった。しかも何の収穫もない佩服(目標に達しない佩服)。

④ 図書館に入っの感想

縁のない所と諦観していたけれどもこの講義のおかげで時計塔の下をくぐる事ができた。子供が探検に行く気分。入口はせまい自動ドア。受付が右手、退職後の再奉公が三年目という受付係の方に色々と話进行う。更に右手の雑誌コーナーには経済誌が沢山あった。いつか来ることになる。コピー代が40円とは高過ぎる。中央から左手は管理関係らしい。

二階をうろつく。まず左手の書籍コーナーから。講義で顔見知りの学兄諸氏の中には、もう本を読み始めている者があって、いささか慌てる。カード室に急ぐ。ここで手間を喰う。「産業革命の研究は民衆生活の変容を明らかにするのだが、特に明治30年から大正初めに於ける岡山県のデータに依る」と夏休み明けの講義の内容を示された神立教授の声が頭をたたく。カードボックスNa217の岡山を見て終る。次回はBoxNa380～389の「風俗習慣」を当ってみなくてはと思って階段へ向かう。

このW.Hは、当初、『岡山県統計書』にもとづき産業発展と郵便貯金額の関連の検討を試みた。さらに「村是調査書」による明治後期の農村民の生活状況の研究を行ない、研究の成果を1987年12月28・29日に開催された社会経済史学会中国四国部会1987年度大会において「日本資本主義確立期の高知県における農村民の生活—高知市近郊・朝倉村の場合」を発表するに至っている。そして後に「神立先生との出会いは講義と演習であった。変わった先生であった。いや、先生が変わっていたのではなく講義や演習が普通ではなかった。学生を図書館に放り込むのである。最初のうちは驚いた。しかし、日がたつに連れて、なぜこんなことをなさるのか意図が解ってくると、大学教育の真髄にふれるような思いに駆られてしまう。わたしの中に図書館を通じて勉強の仕方を勉強することが始まったのだ」と記している。⁽²⁾

4 日本経済史の講義

(1) 講義の概要

第二部における日本経済史の講義は、多くの年度はその年度の第一部と共通の内容である。この第一部の日本経済史の講義内容などについては、着任以来のものをすでに別の機会に記したので、講義内容等についての記載はここでは省略する。大まかにいって、当初の、原始・古代からの独占資本主義の時期までの文字どおりの通史的なものから、地域、地主制などに焦点を当てた特殊講義的なものを経過して、現在の、日本産業革命論に焦点を当てた日本資本主義成立史論となってきた。

(2) 履修者と成績

1970年度からの日本経済史の講義の履修者とその成績は表1のようになる。この履修者数は期末試験を受けるなどした評価対象になる者の数であって、履修票を提出したものの授業には出席せず放棄した者の数は含んでいない。

この24年間、21回の日本経済史の履修者は699人である。成績は、優21.5%、良44.8%、可26.5%、不可7.2%で、合格し単位取得したものは92.7%の648人である。合格率は高く、また、成績も総じて良いといえる。ただしこれは期末試験を受けることのできなかった者を除外してのものであるが、もし素人に授業にほとんど出てこない者が期末試験を受けたなら、不可は格段に多くなったであろう。

この間の1年度あたりは33.3人である。すでに記したが、1970年度から1983年度までははじめの14年間の1年度あたり平均27.6人であったが、1985年度から1993年度までの間の講義のあった年7年間は平均43.7人となった。毎年開講でなくなり、非開講の翌年は多人数となり、開講年の平均は大きくなった。それでも最大でも1985年度の64人であった。総じて少数授業であっ

表1 日本経済史の講義の履修者とその成績

年度	優	良	可	不可	合計
1970年 (昭和45)	2 (2 0) 8.7	14 (11 3) 60.9	5 (5 0) 21.7	2 (2 0) 8.7	23 (20 3) 100.0
1971年 (昭和46)	7 (6 1) 46.7	3 (3 0) 20.9	1 (0 1) 6.9	4 (4 0) 26.7	15 (13 2) 100.0
1972年 (昭和47)	6 (4 2) 28.6	10 (7 3) 47.6	2 (0 2) 9.5	3 (2 1) 14.3	21 (13 8) 100.0
1973年 (昭和48)	8 (7 1) 21.6	11 (10 1) 29.3	9 (8 1) 24.3	9 (8 1) 24.3	37 (33 4) 100.0
1974年 (昭和49)	10 (8 2) 26.3	19 (14 5) 50.0	7 (6 1) 18.4	2 (2 0) 5.3	38 (30 8) 100.0
1975年 (昭和50)	11 (6 5) 50.0	10 (7 3) 45.5	1 (1 0) 4.5	0 (0 0) 0	22 (14 8) 100.0
1976年 (昭和51)	5 (4 1) 22.7	11 (10 1) 50.0	5 (5 0) 22.7	1 (1 0) 4.5	22 (20 2) 100.0
1977年 (昭和52)	7 (6 1) 16.7	24 (19 5) 57.1	10 (8 2) 23.8	1 (1 0) 2.4	42 (34 8) 100.0
1978年 (昭和53)	5 (4 1) 17.2	11 (10 1) 37.9	12 (11 1) 41.4	1 (0 1) 3.4	29 (25 4) 100.0
1979年 (昭和54)	3 (1 2) 11.5	9 (9 0) 34.6	10 (7 3) 38.5	4 (4 0) 15.4	26 (21 5) 100.0
1980年 (昭和55)	4 (4 0) 17.4	12 (11 1) 52.2	7 (6 1) 30.4	0 (0 0) 0	23 (21 2) 100.0
1981年 (昭和56)	2 (2 0) 7.1	22 (19 3) 78.6	4 (1 3) 14.3	0 (0 0) 0	28 (22 6) 100.0
1982年 (昭和57)	4 (4 0) 25.0	8 (7 1) 50.0	4 (4 0) 25.0	0 (0 0) 0	16 (15 1) 100.0
1983年 (昭和58)	2 (1 1) 4.4	12 (9 3) 26.7	26 (24 2) 57.8	5 (5 0) 11.1	45 (39 6) 100.0
1985年 (昭和60)	10 (9 1) 15.6	24 (24 0) 37.5	25 (25 0) 39.1	5 (5 0) 7.8	64 (63 1) 100.0
1986年 (昭和61)	2 (2 0) 11.7	14 (13 1) 82.4	1 (1 0) 5.9	0 (0 0) 0	17 (16 1) 100.0
1987年 (昭和62)	7 (6 1) 16.7	24 (20 4) 57.1	10 (8 2) 23.8	1 (1 0) 2.4	42 (35 7) 100.0
1988年 (昭和63)	6 (3 3) 16.7	15 (13 2) 41.7	12 (12 0) 33.3	3 (3 0) 8.3	36 (31 5) 100.0
1989年 (平成 1)	12 (11 1) 25.5	22 (21 1) 46.8	12 (12 0) 25.5	1 (1 0) 2.1	47 (45 2) 100.0
1991年 (平成 3)	12 (9 3) 21.4	20 (13 7) 35.7	17 (15 2) 30.4	7 (6 1) 12.5	56 (43 13) 100.0
1993年 (平成 5)	25 (18 7) 50.0	18 (11 7) 36.0	5 (4 1) 10.0	2 (0 2) 4.0	50 (33 17) 100.0
合計	150 (117 33)	313 (261 52)	185 (163 22)	50 (44 6)	699 (586 113)
比率	21.5	44.8	26.5	7.2	100.0
21ヵ年の 年 平 均	7.1	14.9	8.8	2.3	33.3

註 各年度上段は人数, () 内は経済学部と法学部, 下段は比率。

たといえる。

成績は年度によってかなりばらつきがある。さまざまな理由があるが、念を入れた授業ができた年度はよい成果となっている、といえる。

(3) 改編後の日本経済史・日本経済社会史論

1995（平成7）年度からカリキュラムは大きく変った。通年制は Semester 制となり、授業科目も半期2単位制となった。日本経済史は日本経済史と日本経済社会史論となった。この改編後の講義について記そう。

① 1995（平成7）年度の日本経済史、日本経済社会史論

この年度の前期の日本経済史は、「講義の目的・課題：日本経済史は日本における資本主義の成立・発展過程の特質の考察を課題とするが、本講義では日本における資本主義の確立＝産業革命を軸とする日本経済史を概観する。講義の進行予定：序章本講義の課題，第1章日本産業革命の歴史的前提，第2章日本資本主義確立期の産業貿易構造，第4章工鉱業における資本制生産の展開，第5章運輸交通の展開・財政金融機構の整備，第6章日本産業革命の特徴，第7章日本資本主義の発展」で、「講義内容の理解を深めるため、授業時間中に附属図書館において『帝国統計年鑑』などによる実習的学習を取り入れる」と記した。

同年度後期の日本経済社会史論は、「講義の目的・重点：『日本経済史』での産業革命の展開についての学習を前提とし、日本産業革命の展開にともなう地域・生活編成を考察する。最近の実証研究の成果を取り入れた具体的内容とする。その際、事例を多く岡山県に求めたものとする。講義の進行予定：序章本講義の内容，第1篇産業革命の展開にともなう地域編成 第1章日本資本主義確立期の地域編成，第2章産業革命の展開にともなう地域編成，第3章産業革命展開期の地域編成過程，第2篇産業革命の展開にともなう生活編成 第1章本源的蓄積期における都市と農村，第2章産業革命の展開にともなう都市住民・農村民の生活変容」で、「講義内容の理解を深める

ため、授業時間中に附属図書館において『岡山県統計書』などによる実習的学習を取り入れる」と記した。

前期、後期の両科目の単位修得者はそれぞれ57人、56人であるが、うち50人は両方の科目を通じて履修した。

授業終了時の感想が提出されたが、「今までは授業自体いつも受身的な姿勢で莫然と臨んでいたが、図書館で統計資料を使って自分で興味のあることを調べたりすることによって、大学というところで勉強するということはこのようなものであると改めさせられました」（編05-860 O.K.）、「前期、後期ともに受講しました。この授業で学んだことは授業の内容うんぬんよりは学校に出てくる、つまり出席することの大切さを学びました。私はもう6年間も通っていますが多くの授業ではレポート提出、試験の出来いかに単位が与えられており、要領の良い人はテストの直前に出席して単位を取っていました。キチンと出席をする、こつこつやっていく、社会に出た時、最も問われるモラルだと思います」（02-858 Y.S.）などと記している。人数も少なく、効果的な授業ができた年度であった。

② 1996（平成8）年度の日本経済史

この年度は履修登録者数は実に220人という大人数となった。この年度は第一部も実に550人という登録者数でこれだけの人数を受け入れる教室さえないという状況である。それは402人という最大の教室で、常時350人程度の出席であった。この第一部の大人数授業の経験はすでに記録してあるが、⁽⁴⁾第二部の授業も内容などほぼ同様にした。

この授業ににおいても学生に対する基本姿勢は、まずは出席させることであった。授業に出席させる姿勢で臨むと大勢出席する授業となり、多くの難問点が生ずる。おしゃべり、代返ならぬ代書、授業中の飲茶、着帽、およそ公共の場とは考えていないような学生たちがいる。それに遅刻である。これらを制止することがたいへんである。学生を出席するように仕向けなければ、出席者はかなり少なくなり、やりやすくなる。しかし、それで済ますこ

とのできない状況になっている。授業に出ずして出席にかわる勉強はできない。勉強させようと思えば、何よりも学生を出席せることである。しかしそれは上記のようなことをひきおこし、それとの格闘が必志となる。

この年度は例年は取り入れている授業中の図書館利用・実習の学習を実施することができなかった。最終的には単位取得者は174人であったが、そもそも、この多数では図書館備えつけられている統計資料を使用しての実習的な授業は不可能であった。これまでのように、能動的に学ぶ機会も与えることができなかった。

第二部学生は、学生による教員の授業についてのアンケートを行なっているが、6月に学生たちが行なったこの授業内容についてのアンケートでは、総合評価：優19, 良36, 可39, 不可20, 判定不能4, 無記入6, 教官の説明：わかりやすい67, わかりにくい33, 無記入など24, 講義の速度：早い24, 丁度いい72, 遅い6, 無記入22, いずれも合計124となっている。1995年度の同様のアンケートでは、優8, 良12, 可2, 不可1, 合計23であったが、1996年度の授業はついてはかなり不可が多い。

9月9日には私の方で授業評価のアンケートを行なった。無記名である。

表2はその評価を表示したものである。(1)については、遅刻に対して厳しく対処したことについて、反対・大いに反対が47%に及ぶことを除いて、ほかは大いに賛成・賛成が76.7%から85%に達している。(2)についても、よい・ややよいが、普通を上回り、ややわるい・わるいは配布講義資料の内容が15.1%であるのを最大として小さく、肯定的評価が大きい。総合評価は、非常によい19.4%, よい44.4%, ややよい17.4%, 合計81.2%を占めているのである。

このアンケート調査の結果は学生によるアンケートの結果と大いに異なっている。その差異は、多分にアンケートの時期の違いにあると思われる。6月という中途と最終回との相違であろう。一貫しての授業の進め方であったが、半年後にはそれなりに理解、受容されてきたものと思われる。

表2 この授業についての学生の評価

(1) この授業におけるつぎのことについての意見

	大いに 賛成	賛成	反対	大いに 反対	どちら でもよい	合計
① 出席するように仕向けたこと について	56 38.4	58 39.7	13 8.9	2 1.4	17 11.6	146 100.0
② 遅刻に対して厳しく対処した ことについて	24 18.8	57 44.5	40 31.3	7 5.5	0 0	128 100.0
③ 授業中の雑談を禁じたこと について	65 44.2	60 40.8	7 4.8	0 0	15 10.2	147 100.0
④ 小ペーパー記入を毎回課した ことについて	49 32.5	67 44.4	18 11.9	3 2.0	14 9.3	151 100.0
⑤ 平常点合否を学生番号で公表 したについて	62 41.3	53 35.3	11 7.3	0 0	24 16.0	150 100.0

(2) この授業におけるつぎのことについての感想

	よい	やや よい	普通	やや わるい	わるい	合計
① 授業内容の適切さ	40 24.7	52 32.1	51 31.5	2 1.2	17 10.5	162 100.0
② 授業レベルの適切さ	40 27.2	43 29.3	53 36.1	9 6.1	2 1.4	147 100.0
③ 授業の進め方（スピード）	40 27.6	33 22.8	51 35.2	20 13.8	1 0.69	14 100.0
④ 担当者の話し方	49 33.3	35 23.8	45 30.6	16 10.9	2 1.4	147 100.0
⑤ 担当者の教える熱意	68 45.6	41 27.5	32 21.5	7 4.7	1 0.67	149 100.0
⑥ 担当者の教え方	40 27.2	52 35.4	42 28.6	11 7.5	2 1.4	147 100.0
⑦ 配布講義資料の内容	41 28.1	44 30.1	39 26.7	20 13.7	2 1.4	146 100.0
⑧ 授業内容の伝わり方	27 18.1	52 34.9	56 37.6	10 6.7	4 2.7	149 100.0
⑨ この授業を履修してよかった	54 37.0	51 34.9	34 23.3	4 2.8	3 2.1	146 100.0

(3) この授業の総合判定

＋3 (非常によい)	＋2 (よい)	＋1 (ややよい)	0 (普通)	－1 (やや悪い)	－2 (悪い)	－3 (非常に悪い)	合計
28 19.4	64 44.4	25 17.4	19 13.2	5 3.5	1 0.69	2 1.4	144 100.0

③ 成績評点

この改編後の日本経済史，日本経済社会史論の履修者の成績はつぎのとおりである。

	優	良	可	不可	合計
1995(平成7)年	13(11 2)	37(30 7)	7(6 1)	0(0 0)	57(47 10)
(日本経済史)	22.8	64.9	12.3	0	100.0
1995(平成7)年	11(9 2)	45(36 9)	0(0 0)	1(0 1)	57(45 12)
(日本経済社会 史論)	19.3	78.9	0	1.8	100.0
1996(平成8)年	25(19 6)	71(60 11)	78(53 25)	7(7 0)	181(139 42)
(日本経済史)	13.8	39.2	43.1	3.9	100.0

1995年度と比較して1996年度の成績のはよくないが，それには，二つの要因が作用しているものと思われる。まずは時間帯である。1995年度は第2限であったが，1996年度は第1限であった。第1限は午後5時40分開始であるが，学生たちの意見を入れ大方が出席できるという5時50分開始としたものの，それでも遅刻がきわめて多かった。有職者でやむを得ない事情であろうが，出席はするものの講義の一部しか聞くことが出来ないということが少なくなかったであろう。そしてなによりも大人数であったことである。出席するように仕向けたことによって出席して多数となったが，受け身の出席が少なくなかったであろう。そのような学生は，あるいは雑談を繰り返し，あるいは居ねむりをする。このことなどによって授業内容がよく伝わらなかったであろう。

5 教職科目の経済地理学の講義

(1) 1992年度の講義

すでに述べたように、社会科教員免許状の関係から経済地理学の経済学部専任教員による開設が必須となった。4年に1度開講するこの経済地理学を、私が担当することとなった。担当したのは1992（平成4）年度と1996（平成8）年度である。

高等学校一種免許「地理歴史」には、教科に関するもののうちに人文地理学及自然地理学が8ないし6単位必要である。本学部第二部では、経済地理学2単位、地理学概説4単位、地理学特講Ⅲ2単位、地理学特講Ⅳ2単位を開設している。地理学概説は隔年開講であるが、ほかは4年に1度開講である。地理学概説の担当者は経済地理学の大家で、内容は経済地理学を主とするということである。このような本科目の位置づけから、この授業科目の内容をつぎのようにした。

1992（平成4）年度の『学生便覧』には、内容として、「経済地理学の概説的講義は『地理学概説』（森滝教授）において行われるので、この授業では日本農業の地域的展開について検討する。『農林業センサス』を資料として演習方式で行なう」と記した。

前半に拙著『戦後村落景観の変貌』における日本農業の状況、その変貌の把握の仕方、日本農業の地域的展開を概観した後、後半は授業時間中に附属図書館において『農林業センサス』によって、任意の一地域、郷里などを選び、戦後の農業の変化を検討することとした。その際に、教員となったときに生徒たちに説明してわかって貰えるようなものにするようにと注文した。

「農林業センサス」は一セットで各府県分は1冊ずつしかないので、重複を避けるように指示した結果、選択したところは、青森県、山形県、宮城県、福島県、茨城県、東京都、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、静岡県、長野県、愛知県と豊田市、京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、鳥取

県、島根県、広島県2、広島県福山市、山口県、香川県、愛媛県松山市、高知県南国市、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県2、宮崎県、鹿児島県（本土と離島）、沖縄県というように多くの府県となった。

この作業を通じて「戦後日本の農業の変貌—東京都の場合—」というような標題のレポートを作成させた。

最終回は、(1) 各人の分担分の検討について、どのような問題点があるか（発見した問題点や課題）、(2) この授業について、ということについて記述して貰った。

この(2)については、「初めは図書館で調べものをするのがとても嫌だった。なんとなく図書館という雰囲気自分に合わず、やっていけるかどうか少し不安だった。でもやっているうちにだんだん慣れて普段図書館を使わない私も利用法がわかり、また、調べるという作業の勉強ができて良かったと思う」(03-806 I.T.)、「当初卒業のための単位になればよい、という考えを多く心の中に持ったまま授業に入った。が、やってみるとこれが中々大変であり、楽しく充実していたと思う。最初のうちは本を読むだけでノートも書かず、少々退屈していた自分であったが、図書館へ行き自分で資料を探して来てそれを調べてレポートにする時間は面倒であったが、結構おもしろく夜遅く図書館が閉まる時間までやるほど熱中していた。教職の科目であるだけに、子供に教えることができるようにレポートをまとめることは非常に難しく今でもよくわかっていないと思う。自分ではわかっていても、自分より歳の小さい者に教え、わからせるためにレポートをまとめることは大変であると感じた。もっと勉強しなければならない」(03-858 W.T.)、を初め多くが授業中に図書館において備えつけられた図書資料を使用しての授業が、受身ではなく、能動的、自主的な学習となったことを記している。

なかには、「私は幸い出身地である福山市を担当することができ、岡山から近いこともあって直接市役所等に尋ねに行くことができて良かった。私の場合について述べると、福山に約20年も住んでいながら今回調べた項目につ

いて一度も疑問を持つことも、知ろうとすることもなかった。しかし、経済地理学の受講をきっかけにより深く福山を知ることができた。自分で市役所に行って農業の歴史を探るのも初めてであり、これが大学での学習要領なのだと実感した。大まかな指示は頂いたもののほとんどが能動的に取り組む形式であったので、自分で調べてみる、そして疑問を持ってみる、という姿勢が身についたように思う。講義の内容については農業の歴史を探ることでその背後にある、その地域の経済的な歴史も読み取れるようで興味深いものでした」(03-807 I.M)というように現地に行って聴き取ることなどさえしている。

この授業のやり方は、履修登録者52人、内全回欠席10人、毎回の出席者の数が30人台という授業でという授業あったので、可能であった。レポートと、試験によって評価を行なったが結果は優良あわせて94%というよい成績であった。かなり手をかけた授業であったが、それなりの成果があった。

(2) 1996年度の講義

第二回目の1996年度は『SYLLABUS』に、前回と同様の概要表示のほか、授業計画として、序論、第1章農業地域の諸類型、第2章農業地域の変貌 その1：都市的農業地域、第2章農業地域の変貌 その2：平地村的農業地域、第3章農業地域の変貌 その3：山地村的農業地域、まとめ、をあげた。アドバイスとして地理歴史の教員としての調査分析能力の育成をめざして、『農林業センサス』を資料として、実習的・演習的方法を大幅にとり入れる」と記した。

しかし、授業は当初の計画はそのまま実施できず、大きく変更せざるを得なくなった。そもそもこの年は履修登録者数は100人もあり、実習的要素を取り入れる授業としては過多となった。そしてなによりも図書館での資料の利用ができなくなったのである。中央館の新館の増築工事、あわせての既設部分の全面的な改装工事のため図書館は閉館となり、利用は不可能となっ

た。このような状況となったので実習的部分はコピー資料を使用することとなった。毎回時間の半分を使用して、説明部分を図表化し、説明を加えることを課した。

時間の都合で講義についてのアンケートなどを行うことができなかったが、12月の初めに学生たちによる授業についての学生を対象とするアンケートが実施されている。この経済地理学の授業については、

教官の説明	わかりやすい	24	どちらでもない	19	わかりにくい	0	無記入	2	合計	45				
講義の進度	速い	1	丁度いい	36	遅い	4	無記入	4	合計	45				
総合判定	優	14	良	16	可	12	不可	0	判定不能	2	無記入	1	合計	45

そこでの意見記入欄には、「毎回小ペーパーとして、グラフや表をかかせるが、何の意味があるのだろうかと思う」「計算ばかりであり役に立たない」「ほとんどグラフ書きに時間が費やされるのがわからない。何を教えているのかわからないためテストが非常に不安」「もっとちがう授業にしてほしい」「面白くないんだよ、お前の授業」「毎回、毎回、グラフ書きは良いのですが、試験はどうされるつもりですか」という否定的な意見、「グラフづくりが頭を使うのでおもしろい」「作業を伴う講義は他と比べて楽しい。ていねいに教えてくれるので良い」「おもしろい授業、楽しんでいる」「丁寧な人だと思う。他の授業とちがって、自分で考えたりできるのが良い」「先生の話は短くてよい。実習はちょっと難しいが楽しい。学生の意見もよくきいてくれ、なじみ深い先生だ」「授業が丁寧だと思う。毎回出席していればちゃんと単位がもらえるし楽しい」「おもしろい」「とてもよい(授業も人柄も)」という肯定的意見が記されていた。これがその総てである。

期末試験では、つぎのような問題を出した(表1、表2はここでは省略)。

表1は、ある村(農業集落)の1970年の農家ごとの農業の状況を示すものである。

あわせて、1960年の経営耕地面積とたばこ作付面積を示してある。

問題 1

- (1) 農家ごとの経営面積の1960年と1970年の相関図を作成しなさい。農家は図上に㊦のように記入する。
- (2) 1970年に借入耕地面積が20 a 以上ある農家は◎にしなさい。
- (3) 1970年にたばこ作付が30 a 以上の農家には赤などの色付けをしなさい。

表 2 は、表 1 の農家を経営階層別に整理したものである。

問題 2

- (1) 表中の空欄を埋めなさい。
- (2) 階層別にみた農業状況の特徴を記しなさい。

問題 3

1970年以降各農家はどのようにになっていくと思うか。なぜそうに思うか。あなたの考えを述べなさい。

授業中の課題・小ペーパー記入を通じて解答は身につけているはずのものである。ただし、単純な誤りが明確に出るというものであったので優が少なかった。

実習的要素を重視する授業であり、平常点を重視しており、この两年度ともに平常授業参加者で試験を受けた者は全員合格であった。

	優	良	可	不可	計	評価 不能	履修 票	全て 欠席	出席 経験
1992（平成4）年度	19	16	2	0	37	15	52	10	42
	51.3	43.2	5.4	0	100.0				
1996（平成8）年度	8	52	17	0	78	22	100	11	89
	10.2	66.7	21.8	0	100.0				

6 演習とその成果

(1) 演習担当の経緯

1977（昭和52）年度以降担当した演習・特別演習の『学生便覧』における内容記載、履修者数および学生の学生番号氏名はつぎの通りである。

1977（昭和52）年度 経済学演習

履修者 15 (46-824 KOUDA.S, 48-844 FUJIO.Y, 49-837 HATTA.C, 49-846 MANABE.Y, 49-848 MIHARA.M, 49-849 MIYAKE.T, 49-861 WAKABAYASHI.N, 50-804 ISHIHARA.K, 50-815 OBIGA.T, 50-824 KITAMURA.H, 50-830 SADAI.T, 50-840 TANABE.M, 50-841 TUCHIYA.H, 50-842 TUCHIYA.K, 50-858 MOTOI.N)

1978（昭和53）年度 経済学演習

履修者 15 (46-824 KOUDA.S, 49-803 OKANO.T, 49-828 TANABE.I, 49-829 TAMAI.N, 49-831 NAKAHARA.Y, 49-846 MANABE.Y, 49-848 MIHARA.M, 49-849 MIYAKE.T, 50-815 OBIGA.T, 50-840 TANABE.M, 50-841 TUCHIYA.H, 50-842 TUCHIYA.K, 50-858 MOTOI.N, 51-802 ISHII.H, 51-816 IGAWA.Y)

1981（昭和56）年度 経済学演習

テーマ：日本における産業革命

テキスト：長岡新吉『産業革命』1979 年教育社

履修者 14 (51-848 FUJIWARA.E, 52-872 WATANABE.K, 53-802 AKETA.N, 53-814 IWASAKI.K, 53-829 KIKUCHI.K, 53-845 SUZUKI.K, 53-846 TAKIGAWA.K, 53-845 NAKAMURA.K, 53-869 MAKI.K, 53-879 YAMADA.T, 54-801 AKASHI.T, 54-811 IBATA.N, 54-815 OGAWARA.Y, 52-859 MARUTA.K)

1983（昭和58）年度 特別演習（経済史）

テーマ：産業革命と国民生活

産業革命＝日本資本主義の確立を国民生活の変容という観点から検討する。は

じめに産業革命について検討し、つぎに産業革命と国民生活に関する文献を読む。以上をもとにして、日本の、特に岡山県を対象として日本資本主義確立期の県民生活問題を研究する。

テキスト：長岡新吉『産業革命』1979年 教育社、角山栄『産業革命と民衆』1975年 河出書房新社

履修者 3 (56-882 TAMAOKI. K, 編 56-891 WATANABE. H, 編57-888 HIKI TA. K)

1985（昭和60）年度 経済史演習

本演習は、日本産業革命〔期〕を中心とした日本資本主義発達史における諸問題の検討を行なう。あらかじめ戦前期日本資本主義の特徴を概観した後、日本産業革命〔期〕についての基礎的文献等読輪を行なうとともに、各人が関心をもつことがらについて研究を行なう。各人の議題は産業革命〔期〕以前でも、戦後をふくめたそれ以後の時期・問題でもよい。入門書的・基礎的、あるいは基本的文献としてはとりあえず下記のものをあげておく。輪読等的にはこれらのうちから選んで使用する。（ここでは文献省略）

履修者 11 (55-841 TABUCHI. H, 57-813 IRIE. R, 57-838 TSUNEMORI. S, 57-839 KAKUTA. K, 57-853 FUKAZAWA. H, 57-872 YOSHIKAWA. H, 58-837 SHIMIZU. A, 58-864 MITSUMORI. M, 58-869 MORIMOTO. K, 編60-887 SATO. Y)

1988（昭和63）年度 特別演習（経済史）

テーマ：日本資本主義史における高等教育

以上のテーマのものに、日本における高等教育の問題を検討する。

履修者 4 (58-850 NOTO. Y, 59-863 BEPPU. J, 編59-892 KITAWAKI. Y, 編 60-885 KANEDA. F)

1990（平成2）年度 演習

テーマ：近現代日本における農業・農村問題

まず日本経済における農業の位置づけのために、日本経済の全体像を学ぶ（宮崎勇『日本経済図説』1989年 岩波書房）。ついで近代化日本農学の発展を学ぶ（脾

峻衆三『日本農業史』1981年 有斐閣)。これらの学習の進展のうらに、1960年代以降の日本の農業・農村についての農村調査を含む調査研究を行なう。

履修者 8 (61-811 ONO.K, 62-817 KONDOH.T, 62-818 IKEDA.H, 62-834 ANDOH.T, 62-835 YASUHARA.Y, 62-843 MITSUHATA.K, 62-847 UEMORI.K, 編62-861 ARAKI.T)

1994(平成6)年度 特別演習(経済史)

社会人編入学生を主対象とするこの特別演習では、岡山県地域に素材を求めて、近代日本の経済史過程の問題を学ぶ。履修者 14。この特別演習については(2)で記す。

(2) 1994年度の演習の成果

この1994年度の特例演習については、『学生便覧』につぎのように記載した。

特別演習

社会人編入学生を主対象とするこの特別演習では、岡山県地域に素材を求めて、近代日本の経済史過程の問題を学ぶ。

まず、テキスト(神立春樹著『近代岡山県地域の都市と農村』1993年 御茶の水書房を用いる予定)を読み、ついで戦前期の『岡山県統計書』などの附属図書館備え付けの図書資料にもとづき研究を行なう。

大学院修士課程(本学は昼夜開講制)への進学に適うレベルの論文を作成することを期している。

履修登録学生数は、本来の対象である社会人編入学者は2で、一般学生12の合計14であった。拙著『近代岡山県地域の都市と農村』を共通に読んだ後、『岡山県統計書』によって任意の項目を選び、検討する、その後関連文献を読ませるということをした。

ゼミ生が作成し、提出したゼミナール論文はつぎのようである。（＊は経済地理学，○は日本経済史を履修した者）

「日本産業革命期における教育状況—明治35～43年における中等教育の変化とその背景—」（03-818 KURAKATA.K ＊），「岡山県の小学校の女子教員—給与状況にみる男女格差—」（03-821 KOUGUCHI.J），「岡山県における離婚—その件数の推移と要因—」（03-826 SAKAGUCHI.M），「自殺について」（03-830 SIBATA.T ＊），「明治期における岡山県の海外渡航者について」（03-831 SHIMOI.T ＊），「産業革命期における和気郡の町」（03-841 NIRO.A ＊○），「戦前期岡山県の医療—病院・医師・患者の推移について—」（03-843 NINOMIYA.K ＊），「明治期の岡山県の河川水害—被害と復興，防災状況について—」（03-844 HIGASHIHARA.K ＊○），「昭和恐慌下で見る会社への影響」（03-845 HIRAMATSU.N）「明治中期・後期の岡山における犯罪—犯罪の時代背景と地域性—」（03-850 HONJOH.A ＊○），「岡山市の水道利用について—明治38年から昭和13年までの推移—」（03-857 RIKUTA.M ＊），「岡山県における犯罪—犯罪件数と時代背景—」（03-858 WATANABE.T ＊○），「紡績業の発展と銀行の預貸率—その時代背景—」（編04-863 KUSUNOKI.K ○），「岡山県における市町村合併と人口について—明治12年から大正14年—」（編06-865 DOI.K）

各自がテーマを設定してとり組んだ研究の成果はその多くが力作であった。例えば，「岡山県における市町村合併と人口について—明治12年から大正14年—」は「明治12年から大正14年に絞り，岡山県の現行市町村の行政区分毎に現住人口・戸数を確定ならびに推定することを目的とし，現在との対比のための確実な基礎資料の作成を意図するもの」で，Ⅰ本論文の主旨ならびに意図，Ⅱ町村合併の時代背景ならびに産業，Ⅲ郡制度について，Ⅳ各市町村の人口，Ⅴまとめ，という構成である。『岡山県統計書』を資料とし，コンピュータを駆使して作成した，資料1 明治22年の町村，資料2 新旧市町村対照表，資料3 現行市町村人口集計表，資料4 郡区市町村比率表，資料5-1 郡区市町村集計表，資料6-1 現行市町村人口一覧表，資料6-2 現行市町村戸数一覧表，資料7-1 市町村人口比率表，資料7-2 市町村人口

比率分析表，資料 8-1 市町村人口伸張率表，資料 8-2 市町村人口伸張率分析表，資料 8-3 市町村比率・伸張率分析表，という，別添資料を付したものである。別添資料のうちの，資料 6-1，6-2 は，現在の市町村について 1879（明治 12）年，1884（17）年，1889（22）年，1899（32）年，1909（42）年，1914（大正 3）年，1920（大正 9）年，1925（大正 14）年，そして 1990（平成 2）年について人口，戸数を算出したものである。本人がいうように基礎資料として貴重なものである。また，明治後期の岡山県の中等教育を検討した「日本産業革命期における教育状況—明治 35～43 年における中等教育の変化とその背景—」は，この年度にこれと同様の岡山県の教育を扱った修士学位論文に互する優れたものである。

学生たちが作成した『ゼミナール通信』1995 年号 にゼミ感想文がある。二，三を引用してみる。

神立ゼミのスタイルと私の成果について

そもそも，私が「神立ゼミ」を受けようと考えた理由は二つあった。一つは一昨年，に神立先生の講義を受けた経験があったことである。この理由は多くの学生がゼミを選択する時に最も重視する点の一つであろう（誰もキビシー先生や，わけのわからない先生のゼミを進んで選択しないであろう）。もう一つの理由は，講義内容を見て，「修士課程……程度の論文を書くことを目的とする」（こんな感じの文だったと思う）という記述が私の心を動かしたともいえる。この点に関しては私の友人の多くが難色を示した。しかし，私の「不毛な長文（論文）を書くことが好きだ」というダークサイドが頭をもたげて，私はチャレンジャーとなった。かくして私は神立先生と 1 年間つきあうようになったのである。

神立先生のゼミのスタイルは大方の予想通り，自分で設定したテーマを自分のペースで図書館で調べるといったものであった。このスタイルは夜間の学生である私にとって非常に親切なものであった。しかし，その半面，決められた課題と決められた答がない分，さぼったらさぼった分だけ自分に跳ね返ってくるというリスクも

内包しているというスタイルである。だがこのスタイルによって論文を作ったことは、私に今までにない発見と成果をもたらした。まず、学問の見地からの成果は、統計等の数字を調べたりするという方法でアプローチしたことにより書物からだけでは学べない本質的なものに近づくことができたことである。また、学問以外ではアルバイトで得た知識（統計の加工方法、設定したテーマのバックボーン）を大学生活に生かすことができたこと、大学のマニアックな利用法を知ったこと、あまり深夜まで大学建物にいと閉じこめられること等々。とにかくこのゼミ論文を作成するに当っては今まで4年間大学に在学していたが、それらの経験以上の経験をしたような気がする。また、神立先生のスタイルだったからこそ、上述の様な経験やアルバイトとの関連ができたのであろう。

最後に、上で「不毛な長大云々」と書いたが、今回提出した論文は長いわりには不毛ではなかったような気がする。その点が今回の最大の成果といえるのではないかと自分で考えたりしている。

(03-818 KURAKATA.K)

この授業の感想

この一年間、この授業を受けている時が、一番勉強をしているということを実感することができました。

他の授業だと、ただ聞いておけばよいだろうと思い、またノートを写しさえすればよいと思ってしまうのですが、この授業だとそうはいかないので、どうしても自分でしなければなりません。受身ではなく、能動的に積極的にしなければ自分が遅れるだけであるので、そういう面では逆に厳しい授業であったかもしれません。

しかし、これが本来の学問の姿だろうと思うので、このような授業が増えればもっと学生の側に活気が出るような気がします。

今後、自分が何か知りたかったら、どのように調べればよいかわかったような気がするので、今回だけで留まらず、今後も続けるよう努力します。

(03-830 SIBATA.T)

神立先生のゼミナールを受講して

神立先生の授業を受講するのは今回で2回目でした。以前は半期だけという教職の短い講義でしたが、その時も今回と同様に毎週図書館に通い、自分でなにかを調べるという作業をしました。でも以前と違うのは、受講している人個人個人がそれぞれの興味のある分野について研究し、論文を完成させるということでした。初めは何について研究しようかと、「岡山県統計書」とにらめっこばかりしていたため、「岡山市水道」に決めた頃は、もうずいぶんと他の人から遅れをとっていたように思います。自分で選んだテーマについて、何度も図書館に足を運んでいるうちに、「私も大学生なんだなあ」と感じることもできました。自分でひろった数字をパソコンに入力し、グラフにすると、推移や変化がはっきりと分るようになります。その図を見ながら、文章を組んでいく論文の書き方は初めてでしたが、一度経験するとくせになり、また何かを調べてみたいと思うようになりました。今回調べた水道についても、悔むことがたくさんあり、できることならもう少し（もう一年くらい）かけて、普及率や給水量の変動の原因となるものをつきとめたかったと思います。また、今回の内容は経済と関わっていないので、水道費や市の水道にあてる経費などといったことも調べてみたいと思います。

一年間やってみて、とても自分にとってプラスになったと思います。

(03-857 RIKUTA.M)

7 第二部教育の充実に向けて

1994年度の特別演習は、ゼミナール論文に力作が多く、大きな成果があった。これまでに、すでに、講義や演習を通じて、優れた成果をあげた学生たちがいた。しかし、その多くは社会人編入の大学既卒業者であった。今回も社会人編入の特別演習であったが、14人のうち、社会人編入は2人で、あとの12人は一般学生であった。第二部夜間課程における1年度だけの演習でも、大きな成果をあげることができる。学生たちのもつ秘めたる力は

大きい。それを引き出すことを援助するのが教員の役割である。

翻って顧みると、第二部における演習・特別演習もかなり経験した。あるときは3人とか4人という小人数であったりしたが、単年度であって、演習もたんなる一授業科目のようになってしまった。それはそれでやむを得ないといえよう。しかし、最初に担当した1977年度は、1978年度も開設したので結果的には2年連続の演習となった。1977年度の履修者15人の多くが連続して履修した。2年連続の演習となりながら、今回のように能動的に学習する喜びを学生たちに持たせることができないままに終わってしまったように思われる。このように不十分なことが多かったが、すぐれたゼミナール論文を作成することができた1996年度の演習は第二部における授業の到達点を示すものといえよう。

この1994年度のゼミナールがそれなりの成果をあげることができたのは、さまざまな条件があったからである。

第一は、多くの学生がすでに私の授業を履修していたことである。14人の履修者のうち、1992年度の経済地理学を履修した者10人、1993年度の日本経済史を履修した者6人である。そのうちで両方とも履修した者は5人である。経済地理学でも、日本経済史でもいずれも授業時間中に図書館における実習的学習を取り入れている。その経験があるということである。第二は、図書館に資料を備え、オープンの場所に配架されていたこと、この年度から開館時間が週日21時までとなったことである。第三は、社会人編入のDOI. I氏が牽引車の役割を果たし、博士課程の森元辰昭氏の学生に対する助言・援助があったこと、であった。このような条件があつてこそであるが、最も重要なのは連続性である。

いま教育改革・大学制度改革に直面している。夜間学部についていうと、国立大学の少なからぬ大学・学部にあった第二部夜間課程はそのほとんどが昼夜開講制・夜間主コースへ移行して、第二部夜間課程は数少なくなってしまった。岡山大学の経済学部第二部は経済学部としては唯一のものとなっ

た。振り返ってみると、第二部に独自の教官組織・事務組織があった時代からみて、教官組織の合体後は第二部は第一部のプラス部分として受けとられ、制度的には明らかに手抜きとなっている。昼夜開講制に移行すればこのことはいっそう強まるに相違ない。昼夜開講制・夜間主コースへの移行が大きな流れであるいま、現行の制度を維持しようとするならば、昼夜開講制がもたらす弊害やマイナス点の指摘に止まらず、現在の不十分な点の改善、いっそうの教育の充実が課題である。充実のためにすでに1年次生の基礎演習を開設したが、継続ゼミナールの開設も課題の一つであり、それを効果的に行なうための教員の第二部担任制も課題の一つであろう。

註

- (1) 拙稿「近代地域史研究史料としての府県統計書—大学図書館備え付けの意義—」『岡山大学経済学会雑誌』第26巻第1号 1994年9月（拙著『大学図書館図書資料論』1996年 御茶の水書房 の第5章となる）。
- (2) 渡辺広安「ハンセイ・ジントク」『岡山大学日本経済史研究会誌』別冊・通巻第14号 1990年10月
- (3) 拙稿「日本経済史の講義の回顧と反省」『岡山大学経済学会雑誌』第29巻第1号 1997年5月
- (4) 拙稿「1996年度の日本経済史の授業—大人数授業での取り組み—」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第4号 1997年3月